

インドの短い旅から (1)



随筆

埜 輝 雄*

プロローグ

1987年12月7日から12日までニューデリーで第7回薄膜国際会議が開催された。既に大量のインド雑学を蓄積していたので、この会議に出席し僅かでもインドを体験しようという決心するのに暇はかからなかった。会議以外の貴重な数日を如何に過すかを慎重に考慮した上で、ボンベイに第一歩を印すこととした。ここでは、高名なタータ基礎研究所(TIFR)を訪問し、土日曜日を利用して、ニューデリーへ向う途中エローラ、アジャンタの遺跡を訪ねるという欲ばった計画を立て、12月2日寒風の吹く大阪空港を出発した。10日間という短い期間で広大なインドのごく限られた地域を大名旅行しただけであるのに、何かを伝えたい気持ちにかられて原稿を引受けた。しかし、この“何か”が難物で、とても明快には表現出来そうもない。仕方がない、体験と見聞と後で考えたことを織りまぜて書いて行くことにしよう。

1. ボンベイの印象

ボンベイの印象を伝える言葉として三島由紀夫の文章“最初に訪れた都市ボンベイは美しい町だった。その汚ならしさも含めて言うに言われず美しいのである。街路のどこを区切ってもそのまま絵になる”。という下りほど適切なものを知らない。しかし第一印象はそんなものではなかった。私共のインド航空307便がボンベイ空港に到着した時は大阪を出発してから13時間経った夜半過ぎであった。途中の寄港地、バンコク、カルカッタでは保安のため機内に留められていたので、排気ガスと得体の知れぬ臭いが混

った30℃を越す、ムツとする空気に包まれて、ホテルバスを30分近くも待たされると疲労と汗で忍耐の限界に近づいてしまった。冷房のないバスでやっと高級ホテル、セントールに着いた時は、午前1時をとうに過ぎていた。ボーイの姿は無く、冷房の効いていない長い廊下をトラックを引きづって歩いて行かねばならなかった。廊下には至る所にルームサービスの食器が放り出され、残飯から発散するスエ臭い匂いが立ちこめていた。これでも1泊1万円以上の高級ホテルかと、ゲンナリしてドアを開けると、室内はよく冷房が効き、質の良い家具、調度、大きな大理石の洗面台と、高級ホテルにふさわしい快適な空間があった。旅を続ける内に、このように快適さと不快さが緩衝地帯なしに繋がるといったコントラストの強さはインドの一つの特徴ではないかと思うようになった。

2. タクシーゲーム

熱帯の強い朝の光を浴びてホテルを囲む木々の緑も、ブーゲンビリアの花の赤もすべて色濃く輝く中を、期待に満ちてタクシーに乗込んだ。目的地は約30km離れた下町で、プリンス・オブ・ウェールズ博物館を見てから、魅力的な建

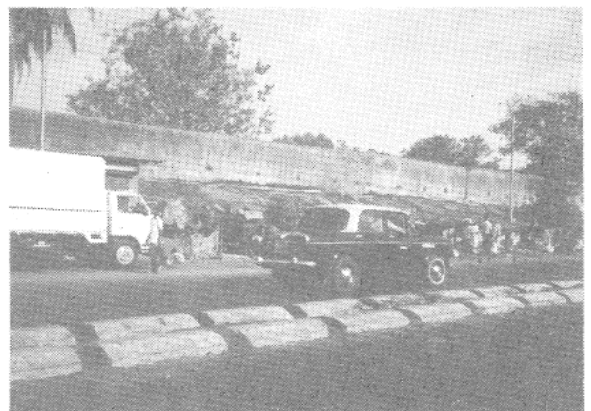


写真1 路上生活者の住居、手前の屋根を黄色に塗った車は、タクシーでインド国産車アンバサダー

*埜 輝雄 (Teruo HANAWA), 大阪大学工学部, 電子ビーム研究施設, 教授, 理博, 電子工学

築を誇る最高級ホテル、タージマハルに赴き、レストラン・タンジョールで印度料理を楽しみ午後は市内の見物、夕食は然るべき所で食べて帰るという予定であった。勿論、料金は乗る前に運転手と80ルピーと約束した上である。所が走り出すや否や“ホテルへ戻る時も使ってくれ”と徐行しながらしつこく迫って来た。断ると、車を停めて“220Rs(ルピー)で何時間でも待つし市内見物もOKである”ネバられた。その内こちら場所によってはタクシーが来るのを当てもなく待たねばならないかも知れない”と考え、“200ルピーなら使ってやる”と値切った。しかしこのような値切りは成功する筈はない。彼等は実に鋭い感覚を持って居り、腕時計を見る所作だけで、時間を惜しむ客の心を見抜いてしまっていたのである。渋々OKして再び走り出した車中で、夜9時になるかも知れないなどと余計なことを喋ったばかりに、更に20ルピーの割増しの約束までさせられ、第1ラウンドは完敗に終わってしまった。

翌朝タータ研究所へ向う時の運転手も同じように往復の契約を言いだした。しかし、こちらは既に1日の経験を積んでいるので驚かない。“研究所の友人と会った上でなければ決められない”とはねつける。すると運転手はサービス作戦に出た。“大きな洗濯場を見たことがあるか”と尋ねたので“ノー”と答えると千人の人間がシャツ等を床に叩きつけて洗濯している青空洗濯場を見物させた上に娼家が並ぶ通りまで回ってくれたのである。しかし、研究所に着いた時、プラサド教授の助力で引取ってもらった。余りガッカリしているので割増金20Rsを加えて100Rs払ってやった。第2ラウンドは判定負けである。夕方ホテルに戻る時は、ついに通常料金80Rsで乗ることに成功し、第3ラウンドは引き分けといった所でボンベイでのタクシーゲームは終了した。

ここまで書いてくるとタクシー運転手は殆んど性悪な連中と誤解される恐れがあることに気が付いた。一言、彼等の名誉のため付け加えておかねばならない、契約が成立するまでは大変であるが、一旦合意が成立して見ると概して人柄は悪くないことに気が付く。ただ、大金を持

っている外人旅行者から如何にして“合法的”に最大限のお金を獲得するかと絶えず研究と実践に努めているだけなのである。大人1人、1日2Rsあれば食べて行ける国でリッター当り10Rs(約120円)という日本並の高価なガソリンを燃やし、(彼等は止まる度にエンジンを止めて燃料の節約に努めている)車の高い借り賃を払わなければならない上、同業者は無数にあるといった状態では勝手知らぬ旅行者に往復契約を迫る心境も理解出来る。しかし、当方にとっては常にヤラレ放しというのは面白くない。且つては中東やパキスタン等で法外な料金やチップを要求されて憤慨したものであるが、今やタクシーに乗るのはゲームと観ずるに至ったのである。

3. 路上で見たこと

旅行前の調査ではボンベイの空港は下町から約30km、北方にあるので、てっきり住民の少ない原野にあり、国内線空港ビルから徒歩5分位の所にあるホテルも同じと思ひ込んでいた。所がホテルから僅かに離れた道路に出ると、両側は切れ目なく路上生活者の掘立小屋で埋め尽くされていたのである。小屋は古トタン、テントの切れ端、壊れた建具等あらゆる廃物(但し、プラスチックは見られなかった)で作られ、軒はやつと背丈位で、広さは4畳半位と見えた。所々空地や、普通の家があるが、汚らしい小屋の列は延々とボンベイの市街地に近づくまで続いていた。初めて見た時は、ああこれが噂に聞く路上生活者の小屋かと思つて眺めただけであった。しかし次の日になると汚さは気にならず、幾つかの小屋には美しくしようとする努力の跡が見られるものがあり、感動を覚えた。すべての小屋にはかなり大勢の人々が住んで居り、路上に出たり入ったり、立話をしたり、炊事をしたりして一種の賑わいを表していた。現在ボンベイ地区には100万を越す路上生活者が居ると言われているので少なくとも数万の小屋がある筈である。いくら大都市であってもこれだけの小屋を作る廃物はそう簡単に集められるものではない。後で調べると、やはり家主が居て、月々10~15Rs位の家賃を取立てる賃貸住宅で

あった。酷しい社会である。そこに住む人々は旱魃のため、ボンベイの東に広がるデカン高原から土地を捨てて流入した農民である。デカンでは1970年終りから1986年に至る8年間、全く雨が降らなかったとの事である。

窓を開け放した車中から（エアコンの付いたタクシーは無い）先ず目に付いたのは道路中央の狭い分離帯に立つ2人の少女であった。2人は10m近く離れて長い布地の両端を持ち、容赦なく照りつける日光の下で、洗ったりサリーを干している。車が巻き起す風によって意外に速かに、しかも清潔に乾くのかも知れない。洗濯物を地面に直接拵げて干している情景は何回も見たが人間物干し竿には驚いた。

車が交差点や渋滞で止まると忽ち新聞やバナナ等を売るハダシの少年達が車の間に入り込んで来て商売を始め、ヤセコケた赤ん坊を抱えた女乞食の細い黒い手が差し出される。バクシーシと力なく訴えられると1Rs位やりたいと思うが、一旦渡すと次々と殺到してくると聞いたし、運転手も“やるな”と言うので、とうとう一度も施さなかった。しかしそれもまた、ささった刺のように心が疼くのである。

市街地ではよく道路工事や下水工事の現場を見たが、ほとんど、女性達が土方をしているのであった。私共はサリーとは優雅なドレスであると思っていたので泥だらけのサリーをまとい頭に乘せた浅い竹カゴに僅かな土を盛って黙々と運ぶ姿を見ていると、一体ここではどんなシステムになっているのかと考えてしまう。賃金が安すぎて男は土方など出来ないというのであろうか？。

もう一つ紹介せねばならないのは先に述べた大洗濯場である。正確な場所は良く判らないが下町の北部、郊外電車の駅に隣接した巨大な、人手で洗濯を行う協同施設があって1000人の洗濯夫が働いていると聞いた。傍を通る大きな道路は陸橋となっているので、すべてが良く見廻せる。1カ所の出入口からは、人間より遥かに巨大な布包みを背負った人夫達が絶え間なく出入し、内部では無数の男達が、泥水のような水を使ってこん棒のように丸めた布地をコンクリートの床に叩き付けて洗濯をしていた。全く泡



写真2 市北部にある大協同洗濯場



写真3 下町の一角

などは立っていない。全く想像を絶する労働の世界で、回り道をしてでも一見に値すると思う。しかし、どうした訳かこの場所を紹介したガイドブックは未だ見たことが無い。

4. タータ基礎研究所

インド最高の数学、物理学研究所で、日本でも良く知られている、Tata Institute of Fundamental Research (TIFRと略称)を簡単に紹介しよう。

TIFRはボンベイの南端に突き出たコラバ岬の西側、下町の高層ビル群が目に見える海岸の一角を占めている。10mの飛び込台付の50mプールのある広い芝生は波打際まで続き、ココ椰子、パニヤン等の熱帯樹に囲まれて、近代建築がゆったりと建っている。ここは一般市民から完全に隔離された美しく静かな学問の殿堂なのである。

TIFRは1945年、インド政府、マハーラシュートラ州政府（ボンベイ市のある州）および



写真4 タータ基礎研究所の本館

タータ財閥（インド2大財閥の一つ）三者協定により設立され、政府代表5名、州政府代表2名、タータ側2名、およびT I F R所長の計10名より成る理事会によって運営されている。

研究所は数学、物理学の二研究部門と管理、エンジニアリング、その他サービス等の研究支援部門より構成され、数学は12名、物理学は74名の教授を擁し、研究者総数は375名で、176名のエンジニア、484名のテクニシャン、600名の事務、その他の雇用者を抱えている。

物理学部門は、(1)理論物理学、(2)天文、理論天体物理学、(3)宇宙線・高エネルギー物理学、(4)原子核物理学、(5)ボンベイ大学コース、(6)固体物理学、(7)化学物理学、(8)分子生物学、(9)コンピュータ科学、(10)コンピュータセンター、(11)電波天文学、等のグループ委員会および、ホミ・バーバ科学教育センター委員会より構成され、各研究者はどれかのグループに属しているが複数のグループに属している人もいる。筆者がコンタクトしたプラサド教授は原子核物理学グループに属し、巨大な14MVのペレトロン加速器を担当している。ペレトロンを収容した塔上に案内されると、アラビア海、ボンベイ市街とすべて見渡せた。塔の地下では目下、ビームラインを建設中で、働いていた若い人に聞くと、“高真空(10^{-6} torr程度)の技術は何とかなるが、超高真空技術は全く未開発である”といていた。プラサド教授の言では“表面物理学は未だ手が着けられない”とのことで、筆者と比較的専門に近い固体物理学グループの何人かの研究者に会うことが出来た。そこではアモルファス

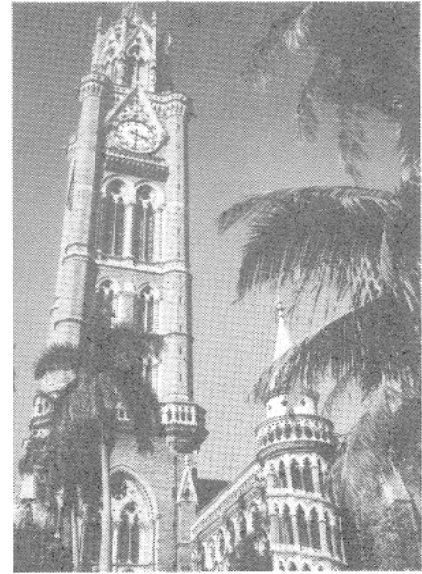


写真5 市の中心部にあるボンベイ大学の時計塔

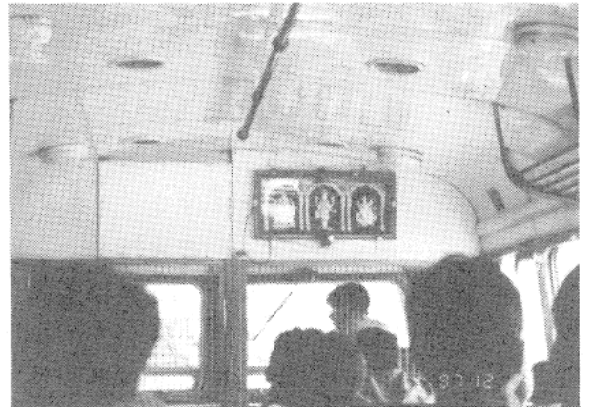


写真6 ヒンドゥーの神々を祀った市内バス

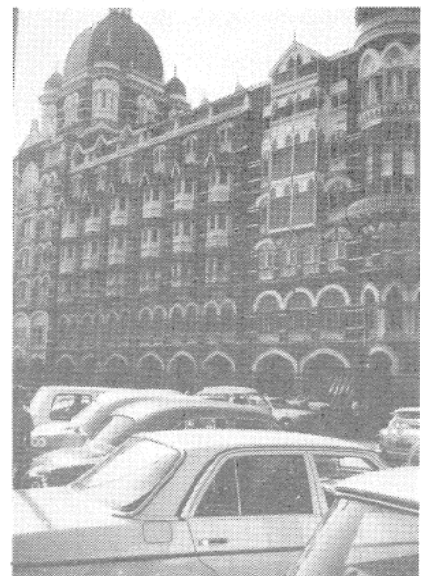


写真7 見事な建築美を見せるタージ・マハルホテル

シリコン，Ⅲ－Ⅴ化合物半導体の分子ビームエピタキシー，各種シリコン素子，半導体レーザー等，世界共通のテーマを取り上げ，かなりの力を注いでいる様子を読みとれた。“電子工学の開発研究に対して政府の強い要請と支援がある”と，或る研究者は語った。早朝からの訪問で，

機関銃のようにプチまくるインド英語にいささか疲れ，カフェテリアでインド式の食事を共にした後，研究所を辞したのは1時半であった。プラサド教授は親切にもインド門までタクシーで送ってくれ，大いに助かった。

